

# 山田風太郎『幻燈辻馬車』を 社会経済史の目で読む —明治の空は碧天だったか— (前篇)

勝 矢 倫 生

## 1 はじめに

明治時代を舞台にした時代小説・歴史小説のなかで力作だと思う作品は何かと尋ねられたら、筆者なら迷わず司馬遼太郎氏の『坂の上の雲』と山田風太郎氏の『幻燈辻馬車』を挙げるでしょう。

ご存じの通り『坂の上の雲』は日本陸軍騎兵部隊の創設者の秋山好古、その弟で海軍海戦戦術創案者としてロシアのバルチック艦隊の壊滅に貢献した秋山真之、その親友で明治時代を代表する文学者で俳句の大成者である正岡子規を主人公にして、彼ら三人の人生を追いながら、明治維新から日露戦争の勝利に至る明治日本の躍動の歩みを描いた長編小説です。『坂の上の雲』は不羈独立をめざす明治の日本国家と国民の苦難と苦闘の道程を澁刺と描いています。

一方、山田風太郎氏の『幻燈辻馬車』は架空の人物、干潟干兵衛という四十六歳の辻馬車の馭者（以後御者）が主人公です。干兵衛は元会津藩士で会津戦争に参戦して敗れ、他の会津藩士とともに北半島の斗南藩に追放された後、東京に出て警察官となり、西南戦争への従軍を経て、辻馬車の御者となりました。

春まだ浅い明治15年(1882)の東京、干兵衛は御者台の側に六歳の孫娘お雛を座らせ、2頭の老馬が引く辻馬車を走させます。干兵衛の辻馬車には毎

日多数の客が乗り降りします。乗客たちは萎む維新への期待と膨らむ失望を抱えながら、それぞれの日々を生きています。『幻燈辻馬車』は干兵衛の辻馬車に乗り合わせた様々な人々が織りなす滑稽で、猥雑で、悲しく、妖しく、そして美しい長編小説です。

司馬遼太郎、山田風太郎の両氏の明治を舞台にする作品は「明治のポジとネガ」などと言われてよく比較されます。筆者は偉そうなことを言えるほど両氏の作品を読み込んではいませんが、必ずしもこの対比に頷くことはできません。

『幻燈辻馬車』は明治時代を舞台にした時代小説・歴史小説であるとともに幽霊が活躍する伝奇小説でもあります。時には滑稽な場面が挟まれるものの、鬱々とした空気が物語を支配しています。それにもかかわらず、『幻燈辻馬車』に多くの読者が心惹かれるのは、虚偽や偽善を憎む著者の強い信念と、一途に生きる無名の人々に注ぐ温かい慈愛をこの作品の端々から感じ取ることができるからだと思います。

本稿は本誌 10・12・13 号に掲載された拙稿「藤沢周平『蟬しぐれ』を経済の目で読む」・「浅田次郎『一路』を社会経済史の目で読む」・「澤田瞳子『火定』を社会経済史の目で読む」の 3 編に続く歴史小説・時代小説を社会経済史の目で読む試みの第 4 編です。読者の皆さんが山田風太郎氏の傑作『幻燈辻馬車』を初めて手に取ったり、再度読み直したりする契機となる役割を果たせば幸いです。

## 2 物語の始まり

### 円朝と円太郎

物語は明治 15 年 (1882) の早春の午後、東京小石川にある福島県令三島通庸 (みちつね 次編で詳述) の屋敷の門内で師匠の三遊亭円朝 (1839 ~ 1900) を待つ弟子の橘家円太郎 (1845 ~ 1898) が呟く怪談噺の一節から始まります。これまで山形県令であった三島通庸は福島県令も兼ねることになり、内務省との連絡のために帰京したのを機会に屋敷内で大宴会が開かれることになり、余興の一つとして三遊亭円朝が呼ばれたのです<sup>1)</sup>。

<sup>1)</sup> 山田風太郎『幻燈辻馬車』新潮社 昭和 51 年 3 頁、『幻燈辻馬車上 山田風太郎明

円朝も円太郎も実在の人物です。円朝は幕末・明治期に活躍し、「怪談牡丹灯笼」「怪談乳房樓」「真景累ヶ潭」などの怪談咄を初め、多数の演目を創作し、落語中興の祖としてよく知られています<sup>2)</sup>。一方の円太郎（4代目）は高座に乗合馬車の御者が吹くラッパを持って上がり、咄や都々逸の合の手に、それをポッポー、ポッポーと吹いたのが人気を博し「ラッパの円太郎」と言われるようになり、人々は乗合馬車のことを逆に「円太郎馬車」と呼ぶようになりました<sup>3)</sup>。

『幻燈辻馬車』には他にも多数の実在の人物が登場します。筆者手持ちの昭和51年8月刊行の初版本の帯紙には「伊藤博文・大山巖・三島通庸・兒玉源太郎・中江兆民・徳富蘇峰・田山花袋・川上眉山・坪内逍遙・森鷗外・赤井景韶・来島恆喜・松旭斉天一・川上音二郎・川上貞奴・花井お梅・松のや露八・嘉納治五郎・武男と浪子、その他数十の有名人が登場して展開する奇想天外痛快無比、絢爛の大ロマン」というキャッチコピーが踊っています。著者は生誕から死に至るまで一人一人の人生模様を徹底的に調査・研究した上で、巧みに物語に組み込んでいます。

三島邸の庭で師匠を待つ橘家円太郎は干兵衛と言葉を交わします。干兵衛の孫娘のお雛を見て、貧しげな身なりにもかかわらず、これほど美しく可愛らしい少女はいないのではないかと感じた円太郎は、「お雛坊ってのかい。かわいいなあ」と声をかけます<sup>4)</sup>。

やがて師匠の円朝が戻ってきて子弟は干兵衛の馬車に乗り込み、家路に就きます。しかし、馬車は途中で人力俵夫（以後車夫）の一団に襲われる災難に見舞われます。これまで辻馬車に客を取られる不平があった上に、近々政府が新橋～日本橋間にレールを敷いて鉄道馬車を走らせ、追々それを延長するという噂を聞きつけた車夫たちはその日、神田明神の境内で鉄道馬車反対の

---

治小説全集3』ちくま文庫 平成9年 9～10頁。

<sup>2)</sup> 延広真治「三遊亭円朝 初代」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第6巻』吉川弘文館 昭和60年）所収 619～20頁。

<sup>3)</sup> 「橘家円太郎4代」『日本人名大事典』講談社 平成13年 1164頁、前掲『幻燈辻馬車』4頁 文庫上 11頁。

<sup>4)</sup> 同上『幻燈辻馬車』7頁 文庫上 16頁。

決起集会を執行しました。運悪くその帰りに出くわしてしまったのです<sup>5)</sup>。

車夫たちは馬車を取り囲みます。外へ逃げ出した円朝・円太郎子弟、円太郎に気づいた車夫は「この野郎、馬車の広告をしやがって」、「半殺しにしてやれ」と叫びます。車夫たちに殴られる子弟、馬車を囲んで詰め寄る車夫たちを退けるために干兵衛は手にした鞭を振るいます<sup>6)</sup>。

## 人力車

人力車は今でも観光地や温泉地で走っていることがあるので、乗ったことがある方もいらっしゃるでしょう。最近まで人力車は日本独自の発明だと言われてきましたが、すでに 1668 年（日本で言えば、寛文 8 年・江戸時代初期）にフランス・パリで発明され、ビネグレットと呼ばれ、その後 200 年ぐらい当地で利用されていたようです。箱形の客室を 2 輪の上に載せたもので一人の車夫が引きました<sup>7)</sup>。

日本最初的人力車は初めて和訳聖書を作った米国人宣教師ジョナサン＝ゴープルの創案とする説もありますが、明治 2 年（1869）に人力車を考案し、翌 3 年、東京府の許可を得てこの車の製造と営業を始めた和泉要助・鈴木徳治郎・高山幸助の三人を真の発明者とする説が有力です。申請を受理した東京府が彼らに申し渡した規則書には、車両は華美にするな、事故を起こしたときは嚴重に処罰する、などと記されています<sup>8)</sup>。

はじめは素朴な箱型だった車体も製造業者の秋葉大助らの工夫改良によって明治 8 年（1875）頃にはほぼ完成した形になりました。明治末には鉄輪の車輪から乗り心地のよいゴム車輪に変わりました<sup>9)</sup>。

徳川期にみられた諸街道における車両交通の禁止・制限が撤廃されたため、明治維新以後、人力車は庶民も容易に利用できる車として歓迎され、全国に

---

<sup>5)</sup> 同上『幻燈辻馬車』8～9頁、文庫上 20～23頁。

<sup>6)</sup> 同上『幻燈辻馬車』10～11頁、文庫上 21～4頁。

<sup>7)</sup> 佐藤美知男「人力車」（荒井秀規・櫻井邦夫・佐々木虔一・佐藤美知男編『日本史小百科・交通』東京堂出版 平成 13 年）所収 289 頁。

<sup>8)</sup> 同上 佐藤美知男「人力車」290 頁、斉藤俊彦「人力車」（『国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第 7 卷』吉川弘文館 昭和 61 年）所収 951～2 頁、同氏『くるまたちの社会史』中公新書 平成 9 年 39～45 頁。

<sup>9)</sup> 前掲 斉藤俊彦「人力車」（『国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第 7 卷』吉川弘文館 昭和 61 年）所収 951～2 頁。



普及しました。当初は近距離の乗客輸送を主な役割としていましたが、明治10年代には東京～仙台間、京都～神奈川間など継ぎ立てによる長距離路線も生まれました。明治29年(1896)、全国の総保有台数は21万台を数えましたが、その後次第に衰退し、特に関東大震災以降は激減しました<sup>10)</sup>。

### 車夫たち

では、どのような人々が車夫となって人力車を引いていたのでしょうか、車夫になった人々の大半は明治維新による失業者でした。まず武士階級、下級の武士たちは幕末期の激しい物価騰貴によって経済力を削ぎ取られたうえ、維新後はそれまで代々給付されていた家禄を失い、その保障として実施された金禄公債の給付を元手に商売や事業を始めたものの、いわゆる「武家の商法」で大半は失敗しました。政府は開墾・移住の保護・奨励、官有地の廉価払い下げ、資金の貸付など士族授産に力を注ぎましたが、さほどの成果を上げることはできませんでした。そのほか、武家の奉公人、武具職人、駕籠かきなどが維新を契機に職を失い、車夫となりました<sup>11)</sup>。

明治32年(1899)に刊行された横山源之助著『日本之下層社会』は、徹底した実態調査に基づき、日清戦争前後における東京の貧民の状況、職人社会・手工業の状況、機械工業の労働者・小作人の生活事情を論じたルポルタージュの名著です。

横山氏は、もし職業で下層民を区別するならば、東京都市部では人足・日傭稼ぎが最も多数を占め、人力車夫がそれに次ぐと述べ、東京15区の人力車夫数を挙げています。図1はそれをグラフ化したものです。「所有車挽き」とは自分所有の人力車で営業する車夫、「借り車挽き」とは賃借りした人力車で営業する車夫です。「挽き子」とは車屋(車夫を雇って人力車の営業をする家、車宿とも言います)に雇われた車夫のことです。どの区も「所有車挽き」は少数に止まり、「借り車挽き」が圧倒的に多数を占めていたことが知られます。

横山氏は、15区の中で細民が多いのは浅草・本所・深川区であると述べ、彼らよりさらに底辺の貧民たちが密集する東京三大貧民窟として四谷区鮫ヶ橋・下谷区万年町・芝区新網を挙げています<sup>12)</sup>。実地見分を基にしたその観

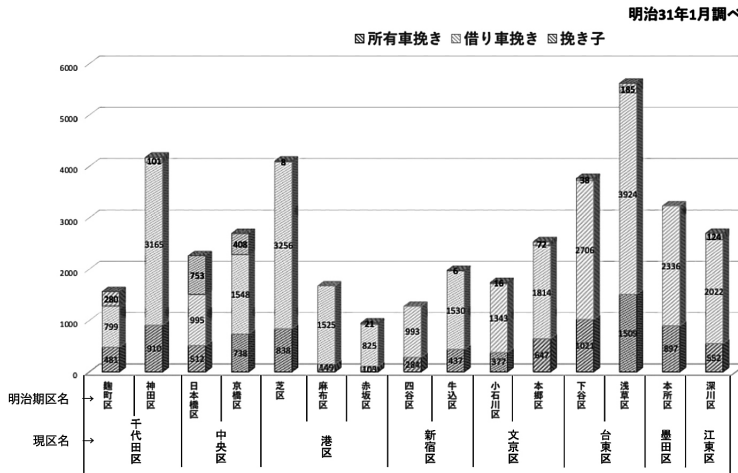
---

<sup>10)</sup> 同上。

<sup>11)</sup> 前掲 佐藤美知男「人力車」(『日本史小百科・交通』所収 291頁)。

<sup>12)</sup> 横山源之助『日本の下層社会』改訂版 岩波文庫 昭和65年 25～7頁。

図1 東京各区の人力車夫数



横山源之助『日本の下層社会』改版版 岩波文庫 昭和65年 25～6頁によって作成

察に誤りはないでしょう。既述の通り、彼は下層民の中では人足・日傭稼ぎが最も多数を占め、人力車夫がそれに次ぐと述べていました。人足・日傭稼ぎのデータがあれば、彼の観察結果はもっと説得力があったでしょう。

横山氏は人力車夫の階層を「おかかえ」・「やど」・「ばん」・「もうろう」に区分して、それぞれの労働形態・勤務状況を記しています。その内容を表1として示しました。人力車夫の大半は貧しく、特に「もうろう(朦朧)」は人足・日傭稼ぎとともに貧民窟の住民の中心を占めていたことが知られます。

『幻燈辻馬車』は横山源之助氏の調査の16年前の明治15年早春から17年の東京を舞台の中心にしています。物語では、顧客を取られる辻馬車を憎み、近々新橋～日本橋間に開通し、追々延長される予定の鉄道馬車を恐れた車夫たちは決起集会を開き、その帰途、出会い頭に干兵衛の馬車を襲いました。作者は不安に駆られた人力車夫たちの動きをうまく物語に組み込んでいます。作中でも触れられているように、実際に人力車夫たちは車会党という組織を結成し、鉄道馬車に対する反対運動を展開しました<sup>13)</sup>。

<sup>13)</sup> ただし、実際に神田明神境内で集会が開かれたのは明治15年10月4日のことで

表 1 人力車夫の階層

(明治31年前後)

種別	労働形態など
おかけえ	月にいくらか給料を定めて富家のお抱えとなった車夫。富家に寄食し、長屋を与えられる者、自宅から日々主人の家に通う者もいる。月給10～15・6円程度。主人が暇な時、別稼ぎをする者もいる。
やど	部屋住み車夫とも呼ばれる。図1の挽き子のこと。車屋(車宿)に雇われ、月々の収入から雇い主の取り分と諸経費を差し引いた給料が渡される。競争がないので気楽。
ばん	一定の駐車場に駐車権(株)を持っている車夫。ばんに入るためには「アジアライ」と称して酒1升と金10銭、以後月々10銭(仲間内の病気などに備える積立金)を払わなければならない。
もうろう	ばんに加入していない流しの車夫。人力車夫のうち最も多数を占め、貧民窟の住人が多い。自前の車を持つ者は少なく、ほとんどの者は齒代(借り賃)を出して車を借り、なかには筒袖・股引まで借りる者もいる。車の齒代は上等10銭、中等8銭、下等6銭。収入は月日によって異なるが、1日50銭程度。いかに節約しても、妻子があれば、最低40銭は必要。残る10銭で家賃・衣服料・子供の小遣いなどを除けば余すところはないに等しいだろう。

同上書 40～43 頁によって作成

図 2 人力車



武内孝夫『遠州地方の交通発達史』  
遠州鉄道株式会社  
平成5年 84 頁の図絵を転載

人力車夫の繁忙期は僅かな歳月に過ぎませんでした。すでにみた通り、横山源之助の人力車夫に関する報告書の内容は悲惨なものでした。明治31年に彼が報告書をまとめた頃、今風に言えば人力車夫業はすでに斜陽業種になっていました。それゆえ、報告書は深刻なものにならざるを得なかったのです。

人力車夫たちを追い詰めたのは市内電車・路面電車です。明治32年(1899)に川崎で開業した大師電気鉄道では、人力車夫たちの抗議を容れて官営鉄道の駅と市内電車の起点駅を離し、その間を人力車で結ぶという妥協が図られました。しかし、次第

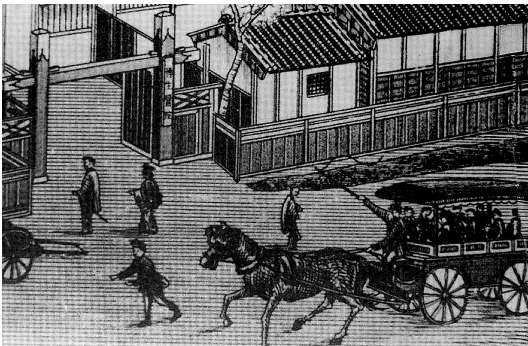
す。新聞記者が付けた渾名「車会党」を正式名称にして各地で活動しましたが、同年11月28日、些細な事件を名目に指導者の奥村健之・三浦亀吉が逮捕されたことを契機に自然消滅しました。(由井雅臣「車会党」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第7巻』吉川弘文館 昭和61年)所収 191～2頁。

に長距離輸送は蒸気鉄道、都市内交通は市内電車が担うようになり、人力車の需要はさらに縮小していきました。明治31年(1898)に初めて日本に輸入された自転車の影響はきわめて大きく、さらにバス、タクシーの開業と経営の拡大によって一部を残して人力車の営業はほとんど息の根を止められました<sup>14)</sup>。

### 乗合馬車・馬車鉄道(鉄道馬車)

江戸時代、わが国では馬車はまったく利用されませんでした。馬車の運行はペリーによる開国後の外国公館の自家用馬車から始まりました。明治元年(1868)横浜～東京築地居留地間に外国人経営の馬車が開業し、徒歩8時間の距離が4時間程度に短縮されました。運賃は2ドルで日本人も利用できました。翌明治2年5月には同区間で日本人の経営による乗合馬車「成駒屋」が開業しました。この馬車営業は、二頭立ての馬車に乘客6名を乗せ、料金は一人金3分(75銭)で、明治5年(1872)に鉄道が開通するまで3年余り営業しました。明治4年、東京市内の千住方面や赤坂周辺で馬車営業が認められると、次第に馬車営業への参入者が増え、競争が激しくなりました。長距離馬車では、明治5年の宿駅

図3 乗合馬車



前掲 『遠州地方の交通発達史』87頁の図絵を転載

制度の廃止後、中山道では東京～高崎間、奥州街道では東京～宇都宮間などに途中に中継所を設けた駅馬車も登場しました<sup>15)</sup>。

短距離の乗合馬車では、粗製濫造の馬車や零細業者の参入が多く、粗末な馬車は瓦多繰(ガタクリ)馬車とか円太郎馬車と呼ばれました。粗暴な御者による馬の酷使を咎め

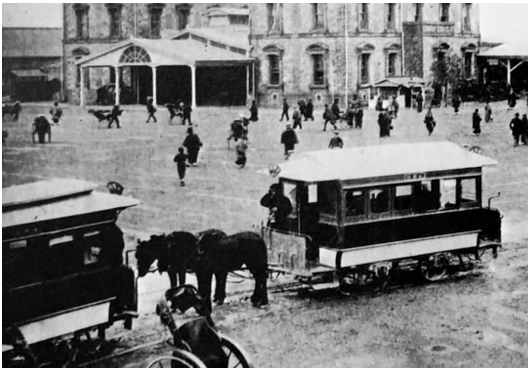
<sup>14)</sup> 前掲 佐藤美知男「人力車」(『日本史小百科・交通』所収 291頁)。

<sup>15)</sup> 山本弘文「馬車」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第7巻』吉川弘文館 昭和61年)所収 951～2頁。佐藤美知男「馬が引く車(馬車と鉄道馬車)」(『日本史小百科・交通』所収 284～6頁)。

る世論が高まり、明治13年(1880)、東京警視本署(警視庁)は「馬車取締規則」を制定し、翌年、馬の虐待防止、清潔保持を求める大改正を行ないました。不平等条約の改正に躍起になっていた政府は何としても在日外国人たちによる野蛮国家の謗りを鎮めたかったのです<sup>16)</sup>。

鉄道馬車(馬車鉄道)はもともと蒸気鉄道に先行する輸送手段として、18～19世紀のヨーロッパに登場しましたが、日本には、明治維新後、蒸気鉄道に遅れて導入されました。明治15年(1882)、新橋～日本橋間で開業した東京馬車鉄道会社が最初です。蒸気鉄道利用者の乗り継ぎ交通機関として利用されることをめざしました。この馬車鉄道は24～27、8人乗りの客車1両を2頭の馬で引き、御者・車掌各1名が乗務しました。営業路線は間もなく日本橋から上野～浅草～浅草橋～日本橋へと延長されて循環線となり、明治36年に電化によって市内電車に移行するまで運行が続けられました。国内各地でも、明治20年代から40年代にかけて、全長2～5里程度の小規模な馬車鉄道の開業が相次ぎました<sup>17)</sup>。

図4 鉄道馬車(馬車鉄道)



佐藤美知雄「馬が引く車」

(同氏他編著『日本史小百科 交通』東京堂出版  
平成13年 283頁の写真を転載)

鉄道馬車は比較的長く余命を保ちましたが、乗合馬車の命は人力車と同様に短いものでした。東京で採算の取れる路線は新橋～日本橋～浅草橋～浅草雷門を結ぶ路線に集中していました。そのため同じ道筋を鉄道馬車が運行するようになると、たとえ運賃を下げても対抗するのは難しく、運営に窮する乗合馬車が増えました。さらに加えて、警

<sup>16)</sup> 佐藤美知男 同上 285頁。斉藤俊彦 前掲『くるまたちの社会史』中公新書 平成9年 39～45頁。

<sup>17)</sup> 山本弘文「馬車鉄道」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第11巻』吉川弘文館 平成2年)所収 543～4頁。

視庁が明治 22 年 (1889) に制定した「乗合馬車営業取締規則」が追い打ちをかけました。その内容は首都の美観を整備するために乞食馬車と軽蔑されていたガタクリ馬車を目抜き通りから追放することをめざすもので、車体の構造制限に対する規定がとりわけ厳しくなっていました。車体検査が不合格になって馬車を新調する資力がない零細営業者は廃業に追い込まれ、さらに乗合馬車の淘汰が進みました。生き残りを図ろうと共同乗合馬車会社を設立する者や英国から輸入した乗合馬車の運行を開始する者もいましたが、いずれも期待外れの営業不振に終わりました。東京の乗合馬車は明治 22 年の 202 台をピークに、その後減少の一途を辿り、10 年後の明治 32 年には 28 台にまで落ち込みました<sup>18)</sup>。

### 御者・馬丁

『広辞苑』を引くと、「御者・馭者」は「馬車の前に乗って馬を操り、走らせる人」、「馬丁」は「馱馬の口取り、乗馬の口取り、べっとう」と書かれています<sup>19)</sup>。「馱馬」とは荷をつけて運ばせる馬、荷馬のことで、別当は「院の厨の別当から転じて乗馬の口取り、馬丁」と記されています。何だか堂々巡りの説明です。ここでは御者とは馬を操り馬車を走らせる人。馬丁は馬車を安全に走らせるために馬の世話をする人と理解しておきましょう。

御者と馬丁の両者が乗り組んでいる馬車は数が限られ、ガタクリ馬車は御者だけというのが普通でした。宮中の馬車は当然として、華族や大臣たちの自家用馬車には御者と共に馬丁数人が乗り組んでいました。馬丁たちは何をしていたのでしょうか。もちろん厩舎に戻れば、馬たちに適切な食糧を与え、健康管理に気を配るのは彼らの重要な勤めです。しかし、馬丁の職務でそれ以上に重要だったのは交通整理をすることで、賑やかな通りや狭い道路、橋を馬車が通る時は、馬の前を走って人々に危険を知らせる役目を担っていました。しかし、怠ける馬丁が多く、車の後ろに乗って居眠りをしていて、巡查派出所の前に来ると御者がチンチンと合図をするので、慌てて跳び降りて走り出すが、暫くするとまた飛び乗って居眠りする馬丁が多かったようで

---

<sup>18)</sup> 齊藤俊彦 前掲『くるまたちの社会史』68～70 頁。

<sup>19)</sup> 「御者・馭者」(新村出編『広辞苑第 7 版 あ～そ』岩波書店 平成 30 年 780 頁、「馬丁」「別当」(同氏編『広辞苑第 7 版 た～ん』) 2367 頁・2540 頁

す<sup>20)</sup>。

明治時代の乗合馬車の御者たちの暮らしぶりを詳しく知りたかったのですが、今のところ、これに触れた文献が見つかりません。前出の横山源之助氏の『日本の下層社会』は御者や馬丁についてまったく触れていません。彼が東京の下層民として挙げているのはすでに述べた人足・日傭稼ぎ・人力車夫の他に、くず拾い、芸人(門付け・大道芸人など)です<sup>21)</sup>。少なくとも彼は御者・馬丁を人力車夫より上位の階層と見ていたのでしょう。

自前で乗合馬車を営業するのはたやすいことではありません。人力車夫に比べてはるかに費用がかかります。まず馬が必要です。馬を買い求める費用はもちろん、一定の飼育技術や馬術が必要だし、日々飼料代がかかります。たとえ中古でも馬車を買い求めたり、借りたりするには相応の費用が必要です。乗合馬車の経営は一定の技術と起業資金がないと始められないし、日々一定の営業収益が得られないと経営を維持できないのです。前述の通り、少数ながら「おかかえ」の御者はいましたが、人力車夫の「やど」・「ぼん」に相当する経営方式は振るわなかったようです。「ガタクリ」馬車の御者たちは下層階級でしたが、少なくとも人力車夫たちより上位の階層であったことは確かでしょう。

『幻燈辻馬車』の主人公・干潟干兵衛は武家時代の上司であった山川大蔵の次男・山川健次郎(東京大学理学部助教授)を頼り、彼が大学への通勤に使っていたアメリカ製の古い馬車を譲り受け、2頭の老馬を自前で買い求めて、乗合馬車の営業を始めました<sup>22)</sup>。馬車は無償で貰い受けたにせよ、老馬とは言え2頭の馬を手に入れるには相応の資金が必要だったはずです。干兵衛は山川家に預けていたまだ幼い孫娘のお雛が愛おしく、自分の手元に引き取って一緒に暮らすには、お雛の面倒を見ながら稼ぐことが出来る乗合馬車の御者になるしかないと考えたのです。

明治時代の人力車と車夫、馬車と御者について紙数を費やしすぎたかも知れませんが。私たちは急いで人力車夫たちに襲われ、窮地に陥った干兵衛とお雛の馬車に戻りましょう。

---

<sup>20)</sup> 斉藤俊彦 前掲『くるまたちの社会史』73～4頁、77～8頁。

<sup>21)</sup> 横山源之助 前掲書 43～7頁。

<sup>22)</sup> 前掲『幻燈辻馬車』22～3頁、文庫上 45～6頁。

### 3 干潟家の運命

#### 幽霊

その時、干兵衛の左腕に抱かれている孫娘のお雛が叫びます。「父(とと)、きてたすけて、父(とと)！」すると、止まっていた御者台が無人の馬車が静かに動き出します。馬車が止まると戸があいて20歳前後の紺の軍帽・軍服を身につけた兵士が降りてきます。蠟を刻んだような顔をして、こめかみから血を滴らせ、制服のあちこちは裂けてそこからも血が流れ出しています。右手にさげている白刃も血まみれです。車夫たちは悲鳴を上げて我先に逃げ出します。現われた兵士は干兵衛の一人息子でお雛の父・蔵太郎の亡霊でした<sup>23)</sup>。

亡霊が去った後、再度馬車に乗り込んだ円朝は干兵衛を行きつけの下谷区柳橋の牛鍋屋に誘います。干兵衛・円朝・円太郎の三人が幽霊談義を交わしている側で、お雛は小皿に取り分けてもらった牛肉を添えて美味しく御飯

を食べています。干兵衛は幽霊の正体は西南戦争で死んだ息子であること、孫娘が本気で必死に呼ばない限り出てこないこと、会津戦争で死んだ干兵衛の妻の亡霊もその時の年齢のままで、しかも息子の亡霊が呼んだ時だけ出てくることを明かします。そして、円朝に、長い間探しあぐねているのだが、五、六年前まで柳橋の色町で芸者をしていたお鳥と

地図1 東京市15区と近傍34町村 (明治40年頃)



「こちずライブラリィ 今と昔をつなぐ地図」所載地図を転載

<sup>23)</sup> 同上『幻燈辻馬車』11頁、文庫上 24～5頁。





それから6年後、会津藩は奈落の底に落ちていきます。会津藩は京都で誠実に治安の維持に努めました。このため幕府が倒壊し、明治政権が成立すると、会津藩は目の敵にされ、厳しい武力討伐を受けることとなりました<sup>28)</sup>。

ご存じだと思いますが、明治元年<sup>29)</sup> (1868) 1月の鳥羽・伏見の戦いから翌年5月の函館戦争までの倒幕派と旧幕府側勢力の戦争を戊辰戦争と総称しています。そのうち明治元年 (1868) 5月、奥羽北越30余藩が奥羽越列藩同盟を結び、官軍に抵抗した戦いを会津戦争と呼んでいます。列藩同盟諸藩が次々と官軍に帰順するなか、8月21日に会津軍は母成 (ぼなり) 峠で政府軍に破れ、23日、若松城下に突入を許しました。会津藩は籠城戦に入りましたが、9月に入ると米沢・仙台藩が降伏、22日には会津藩も降伏しました。十六歳・十七歳の年少部隊「白虎隊」は戸ノ口原の戦いで敗れ、生き残った二十人は官軍が城下に放った炎を城が陥落したと誤認し、飯盛山に登り、差し違えて自刃しました。悲劇は少年たちに限りません。政府軍の来襲が早かったため避難できず、城下武家町の多数の女性たちも自害しました<sup>30)</sup>。

『幻燈辻馬車』の物語に戻れば、城に入れなかった干兵衛の妻のお宵も8月23日に自害していました。からくも逃げて、郊外の農家に養われていた息子の蔵太郎と干兵衛が巡り会った時、「お母 (かか) はのどを突いて死んだよ」と彼は言いました。その時、息子は十歳。干兵衛は三十二歳、死んだ妻は二十七歳でした<sup>31)</sup>。

## 斗南藩

明治元年 (1868)、松平容保は所領を没収されて鳥取藩預けに処せられまし

---

<sup>28)</sup> 「京都守護職」(日本史広辞典見編集委員会編『日本史小辞典 改訂新版』山川出版社 平成28年) 所収 249頁、同項目(高柳光寿・竹内理三編『日本史辞典第2版』昭和49年) 所収 267頁。

<sup>29)</sup> 慶応4年(1868)9月8日、明治改元の詔が発せられ、遡って慶応4年全体を明治元年とすることとされました。併せて天皇1代に元号を1つとする一世一元制も定められました。

<sup>30)</sup> 「会津戦争」・「白虎隊」前掲『日本史小辞典 改訂新版』11頁・828頁、同項目 前掲 高柳光寿他編『日本史辞典第2版』2頁・806頁。なお、この会津藩の悲劇については、司馬遼太郎『街道をゆく33』朝日文庫 平成21年の「会津のみち」、特に176～212頁をぜひ御一読ください。司馬氏は本当に「明治のボジ」なのでしょうか。

<sup>31)</sup> 前掲『幻燈辻馬車』17頁、文庫上 36頁。

だが、翌年赦免されて家名再興が許され、嗣子の容大（かたはる）が陸奥国北郡・三戸郡・二戸郡内に斗南藩3万石を与えられて立藩しました<sup>32)</sup>。降伏した会津藩の侍たちはこの地に追放されたのですが、著者が書いているように、藩とは名ばかりで、ほとんど作物のとれない寒冷の荒野で。会津武士たちの受けた処遇は「日本のシベリア流刑」というべきものでした。人々は皆飢餓に苦しみ、多数の死者が出ました<sup>33)</sup>。

後に海軍大将となった会津人の柴五郎は斗南藩で味わった悲惨な生活について記録を残しています。著者の山田風太郎氏は主に斗南の悲惨な食料事情を記した箇所を引用しているので、本稿では住宅事情について述べた箇所を記します。

秋も過ぎ、恐ろしき冬再び来たりとも、わが家は先年の冬と同じく満足なる所障子なく、箆さげたる乞食小屋なり。陸奥湾より吹きつくる寒風、容赦なく小屋を吹きぬけ、凍れる月の光さしこみ、あるときはサラサラと音立てて霰舞い込みて、寒気肌をさし、夜を徹して狐の遠吠を聞く。終日いろりに火を絶やすことなきも、小屋を暖むること能わず。背を暖むれば腹冷えて痛み、腹暖むれば背凍りつくがごとし<sup>34)</sup>。（下略）

### 西南戦争

明治4年（1871）、廃藩置県が実施され、その翌々年やっとなら解放された干兵衛はまだ幼い息子の蔵太郎を連れて東京へ出ました。すでに触れたように、東京に出て干兵衛が頼ったのは会津時代の上司山川大蔵の次男山川健次郎でした。大蔵の長男浩は陸軍省に勤務、次男健次郎はプロシヤに留学後、東大の物理学助教授、その妹の捨松は、明治4年、わずか12歳で岩倉具視全権大使一行に連れられてアメリカに留学していました。会津人の子弟にしては破格の出世をしていると聞いて干兵衛も息子蔵太郎への教育熱をかき立てられたのです。干兵衛は山川の世話で警視庁の巡查になりました<sup>35)</sup>。

---

<sup>32)</sup> 盛田稔「斗南藩」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第10巻』吉川弘文館 平成元年）所収 395頁。

<sup>33)</sup> 前掲『幻燈辻馬車』17頁、文庫上 36頁。

<sup>34)</sup> 石光真人編著『ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書』中公新書 昭和46年 71～2頁。

<sup>35)</sup> 同上『幻燈辻馬車』18～9頁、文庫上 38～9頁。

時は流れて明治10年(1877)、西南戦争<sup>36)</sup>が始まりました。薩摩を討つと知って東北諸藩の元武士やその子弟たちは次々と兵士や巡査に応募しました。警視庁も警視隊という実戦部隊を編成して出動することを知ったからです。干兵衛も警視隊の一員として出征することを望みました。彼を驚かせたのは息子の蔵太郎も巡査になることを志願したことでした。蔵太郎は19歳、福沢塾に入っていました。彼はどこか蒲柳(ほりゅう)の性(たち)の若者で、数日間口をきかない憂鬱症に陥るようなところがあったからです。「母上の仇を討つのです」と、ただけしい眼の光で蔵太郎は叫びました。その一言に魂を打たれて、干兵衛はうなずきました。「よかろう。いっしょに芋征伐にゆこうぞ」<sup>37)</sup>。

二人は一緒に警視庁の巡査として出動することになり、上官の配慮で同じ戦場で、しかも、泣く子も黙る警視庁抜刀隊として働くことになりました。

3月15日、田原坂の戦いで干兵衛は薩軍13人を倒しました。その原動力は先に切り込んだ蔵太郎を救うために彼が突入した時、蔵太郎が倒れているのを見て狂乱状態に陥ったからです。倒れる前に蔵太郎は「戊辰の復讐」と絶叫しました<sup>38)</sup>。今際のきわの蔵太郎と干兵衛のやり取りを概略記します。

「いつか言おう言おうと思いつながら言いそびれていたが、おれに赤ん坊が生まれる。女は柳橋の芸者でお鳥という。だから父上に言いにくかった。この夏にも生まれることになるはずだ。もし生まれたら、よろしく頼む。万一のため、山川健次郎様のところへ相談に行けと言ってある」

---

<sup>36)</sup> 明治6年(1873)の征韓論の分裂後、下野していた西郷隆盛を中心とした鹿児島士族たちが起こした反政府暴動を言います。西郷らは私学校を中心に子弟を養成し、鹿児島には士族の支配体制が続きました。政府の開明的諸政策や士族解体策に反対し、明治10年(1877)2月、西郷は私学校の生徒に擁され、軍を率いて熊本鎮台を攻撃、明治政府は徴兵令による軍隊などを差し向け、ただちに鎮圧に当たりました。西郷軍は3月4日からの田原坂の戦いで死闘の末に敗北、9月24日、政府軍は西郷らがこもる城山を攻撃、西郷以下約160人が戦死あるいは自刃しました。

明治7年(1874)の佐賀の乱、明治9年(1876)の神風連・秋月・萩の乱、明治10年(1877)の西南戦争、加えて翌明治11年(1878)の大久保利通暗殺事件(紀尾井坂の変)を最後に不平士族などによる反政府運動は、すでに始まっていた自由民権運動に移行しました。(「西南戦争」前掲『日本史小辞典 改訂新版』所収538頁、同項目 前掲 高柳光寿他編『日本史辞典第2版』533～4頁)

<sup>37)</sup> 前掲『幻燈辻馬車』18～9頁、文庫上 38～9頁。

<sup>38)</sup> 同上『幻燈辻馬車』19～20頁、文庫上 40頁。

「そんな女がありながらどうしていくさに来たのか」干兵衛は詰問します。蔵太郎は鉛色の唇をわななかせて答えます。

図5 シャぐま（赤熊）



「NHKアーカイブス」所載写真を転載

「父上、もう一つ、どうしても言いにくかったことがある。会津で母上が死んだとき、死ぬ前に家に入って来て、母上を官軍の隊長が・・・」「なんじゃと、官軍の隊長が何をした」「何をしたか。その時はわからなかった。おれはただ見ていたんだ。ただ見ていたのが情けない。ずっと後になってわかった。そいつは母上を犯した。母上はその後でのを突いて

死んだ・・・そのことをどうしても父上に言えなかった。おれがこのいくさに来たのはそのためだ」「そいつは誰だ。その名は」「わからない。ただ、シャぐまをかぶっていたから隊長だと後でわかっただけで・・・、薩摩退治にここに来たが、長州だったか、土佐だったかもわからない」「そやつの顔は？」「父上、おれはそいつの顔さえ忘れてしまった」

蔵太郎は干兵衛の腕の中であぐんとのけぞり、田原坂の春の蒼空に悲しみをたたえた眼を向けたまま息を引き取りました<sup>39)</sup>。

### 馬車屋干兵衛

役の後、東京に復員すると干兵衛はすぐに柳橋に行ってお鳥という芸者を捜し歩きましたが、どこの置屋に行ってもみんな「そんな女は知らない」というばかりでした。蔵太郎が「女に子供が生まれたら、山川健次郎様のところへ行けと言ってある」と言ったことを思い出して山川家を訪ねると、そこに赤ん坊がいました。「自分はわけあって育てることができないので、蔵太郎様が帰るまでしばらくお預かりいただきたい」との手紙をつけて今夏、山川家の屋敷の門前に捨てられていて、「名はお雛とつけた」とも書いてあった」というのです。赤ん坊は女の子でした。一刻も早く引き取りたい素振りを見せる干兵衛に、山川健次郎は、「独り身のお前ではどうにもなるまい。頼まれたことだから牛乳で養っておるが、こちらは女手もあるから何とかしてお

<sup>39)</sup> 同上『幻燈辻馬車』21～2頁、文庫上 41～3頁。

る。みな、かわいがっておる。お前がもう一度女房でももらうか、せめて子供が歩けるようになるまで、ここに置いておくがいい」と勧めます<sup>40)</sup>。

一年後、干兵衛が再びお雛を引き取りに行くと、干兵衛がまだ妻帯していないときいて、「それならどうするのか。巡查のお前が」と詰問します。干兵衛はどう答えたか、すでに皆さんのご承知の通りです。「この度、山川様はこれまで通勤に使っていた馬車を買換えられるときいています。古い馬車を無償で頂戴したい。馬はどこからか、廃馬寸前の馬なりとも手に入れます。巡查をやめて町の馬車屋になるつもりです」。

「それは大変だぞ」と心配する山川に対して、干兵衛は決意を変えませんでした。こうして干兵衛は巡查をやめ、町の馬車屋になったのです<sup>41)</sup>。

## 二つの誓い

干兵衛はそれまで住んでいた芝の露月町の長屋で毎晩お雛を抱いて寝ました。お雛がむずかれば、錆びた声で会津やみちのくのわらべ歌を歌ってあやしました。四十を過ぎた男が赤ん坊を馬車に乗せて面倒をみる苦労は一通りではありません<sup>42)</sup>。

お雛が三つの年の春、いつにない大嵐が来て、壊れた屋根を直すために、干兵衛が降り注ぐ雨の中、屋根に上っていると、下でお雛の泣く声がしました。はじめは「祖父(じじ)、祖父(じじ)」と呼んでいたのが、「父(とと)、父(とと)」という甘えるような声に変わったので、屋根の穴から座敷をのぞくと、なんと息子の蔵太郎の亡霊がお雛を膝の上に抱いて座っていました。蔵太郎の幽霊が現われるようになったのはそれ以来のことです。蔵太郎の幽霊はお雛が呼ばない限り、干兵衛が呼んでも出てきません。しかもお雛がふざけて呼んでも出現しないのです。彼女がほんとうに父を求めて命の限り呼んだ時だけ出現するのです<sup>43)</sup>。

今度は干兵衛の妻・お宵の幽霊が出現します。その年の秋、お雛は高熱を出して、食べ物を受け付けず、食べてもすぐに吐いて、医者をも呼んでもますます容態が悪くなりました。昏睡の中からお雛は父を呼んだのですが、現わ

---

<sup>40)</sup> 同上『幻燈辻馬車』21～2頁、文庫上 43～5頁。

<sup>41)</sup> 同上『幻燈辻馬車』22～3頁、文庫上 45～7頁。

<sup>42)</sup> 同上『幻燈辻馬車』23頁、文庫上 47頁。

<sup>43)</sup> 同上『幻燈辻馬車』24頁、文庫上 47～9頁。

れた蔵太郎の幽霊は困惑の様子で、「母上、お助けください」と叫びました。程なく戸を叩く者があり、入って来たのは女房のお宵でした。彼女は丸髷ががっくり崩れ、黒紋付の着物はあちこち裂け、雪白の喉から血を滴らせたままでした。「お久しゅうございます。旦那さま」と干兵衛に挨拶をし、すぐにお雛にすり寄って床の中から抱き上げ、小さな茶碗と箸を取り上げ、「お前の祖母（ばば）が来たよ、お雛、さあお食べ」と粥を箸にのせて小さな口に運んでやると、お雛は眼を閉じたまま素直にそれを食べ始めました。惨澹たる姿ですが、なんとという美しさでしょうか。かつて会津切っ手の美女と言われたその容姿は二十七歳で死んだときの姿のままでした<sup>44)</sup>。

西南の役以来、干兵衛の魂を最も苦しめた対象は女房のお宵でした。田原坂で蔵太郎の告白を聞いてから彼の人生を暗黒にただけでなく、それまでのお宵の思い出のすべてを苦痛に満ちたものに変えてしまったのです。その秘密を黙っていた蔵太郎の心を思いやると胸が張り裂けるようでした。落城の前に自害しただけでも不憫なことと思っていたのに、官軍の隊長に犯されたとは、妻の無念さはいかばかりか。その官軍の隊長はどこのだやつだ。そやつはまだこの世に生きているのか、干兵衛はお宵が最初に現われた時、尋ねるのが恐くて、それを訊けませんでした、2度目に現われた時それを訊くと、「それを知りたいのは私です。けれど、それが何という男か、どこにいるか、わたしにもわからないのです」と答えるばかりでした。

蔵太郎やお宵の幽霊は度々出てきてもらいたいと干兵衛もお雛も望んでいましたが、次第にその回数は減っていきました。お雛が呼んでも、本当に出てきてほしいのに、ついに蔵太郎が出て来ない場合が増えてきたのです。蔵太郎が出てこないとお宵を呼ぶことはできません。お雛が呼ばないと蔵太郎が出てこないように、蔵太郎が呼ばないとお宵が現われない仕組みになっているのです。お雛が混沌たる童女の世界から浮かび上がって来るにつれて、その声があっちの世界へ届かなくなるとすれば、いつの日か、それもあまり遠くない日のうちに妻と俣の亡霊にもう会えなくなる時が来るはずです。

干兵衛は堅く心に誓います。「この世にあの二人が現われてくるうちに、何とかして二つの捜し物の願いを叶えてやらねばならない。…お雛の母親の

---

<sup>44)</sup> 同上『幻燈辻馬車』25～6頁、文庫上 50～2頁。

行方と女房のかたきのいどころと…」<sup>45)</sup>。

## 4 壮士たちの影

### 警視庁の密偵 (いぬ)

「あ、ガス燈だ」お雛の声に干兵衛は物思いから醒めました。馬車は時ならぬ春の雪がちらつく夕闇の中を走ります。二人はほとんど每日一膳飯屋で食事を済ませ、馬車を疍(ねぐら)にする暮らしをしているのですが、今夜は芝露月町にある住まいに戻ることにしました。「おうい、馬車屋」遠くから男の呼ぶ声がします。ガス燈の下に五人の男の立つ影が見えました。

四人はザンギリ頭、黒紋付の袴、白い太い紐、短い袴から突き出した素足に高足駄を履き、ステッキをついています(ちょっとイメージが違いますが、

図6 壮士



Wikipedia「壮士」  
所載の写真を転載

図6はWikipediaに載せられている壮士像です)。ひよろりとした長身の男一人だけがフロックコートに山高帽のいでたちです。彼らは自由党の壮士です<sup>46)</sup>。

壮士とは、一口に言えば、自由民権運動の高まりにともなって発生した政治活動家たちです。彼らは自党の政談演説会を盛り上げるために弁士に声援を送ったり、警官の演説中止や解散命令に抵抗したり、また他党の演説会を妨害することもしばしば行ないました。壮士の活動が活発になったのは、明治13年(1880)の国会開設請願運動以後、集会条例を制定して政府が政談演説会や政社の活動を抑制し始めてからのことです。彼らはほとんど自由党系の政治青年であり、自由党は有一館や有為館などを建設して壮士の養成をはかりました。自由民権運動のいわゆる激化諸事件(群馬・加波山・秩父事件)では、その煽動者として活躍しました。なかには政府に買収

<sup>45)</sup> 同上『幻燈辻馬車』26～8頁、文庫上 52～6頁。

<sup>46)</sup> 同上『幻燈辻馬車』29頁、文庫上 56～8頁。



され、スパイの役割を演じる者も現われ、金銭の強要を行なうなど、無頼的存在になった者もいました<sup>47)</sup>。

では、自由民権運動とは何でしょうか。高校時代に日本史で学習した方々はこれを機会にぜひ思い出して下さい。そうでない方々は、面倒ですが、理解に努めてください。なぜなら、『幻燈辻馬車』のこれから先の物語は終わりまで干兵衛一家と壮士たちとの厳しい葛藤の物語になるからです。

征韓論争に破れ、下野した板垣退助・後藤象二郎・江藤新平らは明治7年(1874)、愛国公党を結成し、「民撰議院設立の建白書」を左院<sup>48)</sup>に提出しました。建白書の内容は、現政府の政治は一握りの有司による専制政治であると批判し、納税者には当然国政に参与する権利があり、民撰議院＝国会を設立し、国民を政治に参与させ、官民の一体化をはかることによってはじめて国家・政府が強力になると主張するものでした。建白の内容に対する賛否を巡って国内に論争が起こり、国会開設について知識人をはじめ多数の人々が議論に参画し、自由民権運動の口火が切られました。

建白後間もなく故郷の高知に帰った板垣退助は明治7年(1874) 同士を集めて立志社を結成し、以後、同様の結社が四国・九州など各地に生まれ、それらの結社は愛国社に結集しました。最初は政府に不満を抱く不平士族が中心で、立志社は西南戦争に呼応しようとする動きさえみせましたが、地租改正事業に異議を唱え、農民の利害を主張する豪農層の要求が活発化し、自由民権運動は彼らの支持を得て全国的に拡大し、明治13年(1880) 愛国社は国会期成同盟と改称、20万余の請願署名を獲得しました。

政府は集会条例などで弾圧を加える一方、開拓使官有物払い下げに反対し、国会の早期開設とイギリス流政党政治の実現を説く参議大隈重信を罷

---

<sup>47)</sup> 後藤靖「壮士」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第10巻』吉川弘文館 昭和62年) 所収 533頁、同項目 前掲 高柳光寿他編『日本史辞典第2版』所収 555頁。

<sup>48)</sup> 廃藩置県後、中央集権体制の強化をめざして、それまでの太政官は正院・左院・右院の三院制となり、神祇官は廃止されました。正院は政治の最高機関で太政大臣、左右大臣、参議を置き、左院は立法機関、右院は各省の長官(卿)・次官(大輔)で構成される連絡機関とされました。この結果、薩長土肥、特に薩摩・長州の旧下級武士たちが官僚として政府部内で実権を握るようになり、有司専制の藩閥政府が形成されました。(稲田正次「左院」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第6巻』吉川弘文館 昭和60年) 所収 235頁、「左院」前掲 高柳光寿他編『日本史辞典第2版』所収 395頁、「左院」前掲『日本史小辞典 改訂新版』389頁)。

免する一方で（明治14年の政変）、明治23年の国会開設を約束する勅諭を出しました。この間、国会期成同盟に結集した土佐派を中心とする人々は同明治14年10月、日本最初の全国政党である自由党を結党し、都市の知識人層は翌年大隈を総理に立憲改進黨を結党しました。その後、政府の厳しい取締りや巧妙な政党離間策、松方デフレ政策による運動支持層の窮乏化による運動資金の不足・枯渇などによって民権派内部の分裂や抗争が生じ、さらに福島・喜多方事件、群馬事件、加波山事件、秩父事件などの激化事件が続発しました。明治17年（1884）10月、自由党は解党し、改進黨も同年12月大隈ら首脳部が脱党し、組織的運動は衰退しました。憲法発布を前に民権派は地租の軽減、言論集会の自由、外交の刷新を求める三大事件建白運動や大同団結運動を展開します。その結果、明治23年（1890）の帝国議会開設にあたって、民権派の流れをくむ民主党が衆議院の多数を占めました<sup>49)</sup>。

それでは、物語に戻りましょう。

干兵衛は五人の壮士を馬車に乗せます。「日比谷へやってくれ」と三十代の赤ら顔で髪が真っ白な男が言います。干兵衛は乗り込んで来た二十代半ばの壮士に「やあ。服部伍長」と声をかけます。西南戦争で警視隊として共に戦ったことが懐かしく、思わず声をかけたのですが、これが悲劇の発端となってしまいます。「伍長？伍長とは何だ。服部」と白髪の壮士は詰問します。「おれは知らん」と答える青年壮士に、「わしは忘れたかも知れんが、倅の方なら憶えとるだろう。警視隊でそれ、あんたと仲が良かった干潟蔵太郎、わしはあれの親父だよ」と言葉を重ねてしまいます。

馬車の行き先は急遽建設中の鹿鳴館付近に、さらに築地の海辺に変更されます。馬車を降りた壮士たちは服部に詰問します。「巡査をやっていた自由党員はいくらでもいる。なぜ巡査隊として西南の役に参加したことを言わなかったのか」「告白しよう。告白しよう」と煩悶していたが言えなかった。おれは警視庁の密偵（いぬ）だ。現在ただいまも」「俺はいま警視庁と手を切り、本当の自由党員として生まれ変わることを誓うが、それにしても今まで

---

<sup>49)</sup> 後藤靖「自由民権運動」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第7巻』吉川弘文館昭和61年）所収 301～7頁、同項目 前掲 高柳光寿他編『日本史辞典第2版』所収 460～1頁、同項目 前掲『日本史小辞典 改訂新版』所収 389頁。

白状しなかったことを詫げる。打つなり、蹴るなり、気の済むまで制裁してくれ」と詫げる服部にフロックコートとの男は言い放ちます。「死んでもらおう」自身も元巡査で、服部と親しかった赤井景韶（かげあき）は「そこまでは酷だろう」と引き留めます。しかし、フロックコートの男は引き下がりません。自死を選ぶか、対決を選ぶか迫られた服部は対決を選び、フロックコートの男・柿ノ木義康に一刀両断に斬り捨てられます<sup>50)</sup>。

顎髭の男・風間安太郎、白髪のア（しん）剛三郎・フロックコートの柿ノ木義康の三人は服部が殺される現場をみていた干兵衛を亡き者にしようと馬車に駆け寄ります。猛然と踊りかかってきた風間から身をかまし、干兵衛はその背に鞭を叩きつけます。秦が白刃を取り直すのをみて、「秦、お前ではだめだ、のけ」と柿ノ木が青眼の位置に構え、刀を止めます。干兵衛は会津でも見たことがないほどの遣い手であることを直感します。「お許し下され。見たこと聞いたことをよそでしゃべろうとは思わぬ。拙者これでもあなた方の共鳴者のつもりで」と詫げ、赤井が「御者風情だ、見逃してやれ」と言いますが、柿ノ木は「何を喋るかわからん御者風情だから始末しておかなければならんだ」と聞き入れません。「それなら、せめて対等の武器でやったらどうだ。刀を与えてやれ」と赤井は言います。「やりたくない。私はやりたくない」干兵衛はうめくように言いながら刀を取ります。柿ノ木はじりじりと体を半身にし、刀を右手一本だけで握って前にのぼし、左手を後に上げていきます。まるでフェンシングの姿勢です。柿ノ木の銅面みたいな顔にあぶら汗がにじみ出ています。「許してください。お願いでござる」青眼に構えたまま干兵衛は何度も言います。その時です。うしろの馬車でふいに女の子の泣き声が起こったのです。壮士の風間がお雛を横抱きにして吠えています。「御者、刀を捨てい。抵抗するとこの餓鬼、絞め殺すぞ」

風間があっと叫んでお雛を干兵衛に向かって放り出したのは、相手の凄まじい勢いのせいでした。干兵衛は刀を投げ捨て、お雛を受け止め、どうと両膝を突きます。そして壮士たちに向かって叫びます。「この子に万一のことがあってみろ、わしは化けて出るぞ」「よしよし、よしよし祖父（じじ）がいる。もう大丈夫じゃ」火のつくように泣くお雛を抱きしめ、干兵衛が無防備のまま身を翻したとき、柿ノ木の剣が流星のようにのびます。間一髪、赤井

<sup>50)</sup> 前掲『幻燈辻馬車』29～36頁、文庫上 58～69頁。

が立って言います。「いかん。これ以上、同士討ちはしたくない」と「おい、おれを相手にしてやる気か」柿ノ木がすかされた声で言います。それに対して赤井が言います。「服部のことは仕方がなかったとして、罪もなければ縁もない町の馬車屋を殺すということには、おれは抵抗を感じる。その上、子供までいるじゃないか。許してやれ」雪の上に座って女の子に頬ずりをしている御者を見て、柿ノ木義康の刀身が徐々に下がります。ようやく殺意が萎えたようです。

赤井は命を助ける条件に干兵衛に服部の死体を埋める手伝いをさせ、以後このことは黙っていることを誓わせます。干兵衛、赤井、秦、風間によって服部某の屍体は雪の原っぱの地下1メートルばかりの所に埋められます。やがて彼らが帰ってくると、一人残っていた柿ノ木は言います。「御者、もう一度鹿鳴館のそばへやってくれ<sup>51)</sup>」

馬車の天井の小さなランプが揺れています。柿ノ木義康は「向こうへ行って改めて同士と相談したいのだが、三島の暗殺は中止する」とつぶやきます。「なぜ」と問う秦に柿ノ木は同士の中にあんな警視庁の密偵（いぬ）が入っておったとわかったからだと答えます。この分では他にも警視庁の密偵はおりかねない。いや相当混じり込んでいる。三島どころか、下手に動けば、一網打尽が落ちだ。今夜の会合すら危険な気がしてきたと言うのです。

彼らは皆自由民権を叫んで結成された自由党の中の過激派です。言論による要求は実現の見込みなし、現在の薩長閥の領袖たちを抹殺しなければ目的は果たせないとみる一団でした。党首の板垣退助などは楽天的でしたが、活動に危機が迫っているとみる彼ら一派の判断は当たっていました。

柿ノ木義康はそのグループの中心人物でした。年の頃は三十歳半ば、土佐人だが、早くから国を出て、土佐訛りはなく、フランスに留学していたと言われています。中江兆民の秘蔵弟子でしたが、相当激しい兆民先生も顔を背けるような過激派のせいで破門されたと言われています。

柿ノ木は普段は冷静沈着で一派の首領としての資格を十分具えていました。特に学がなく血気だけの壮士たちの指導者として打ってつけでした。彼は平等の見地から、「先生」と呼ばれるのを嫌い、敬語も避け、あくまでも同士を同士として扱いました。

---

<sup>51)</sup> 同上『幻燈辻馬車』36～41頁、文庫上 69～80頁。

おまけに彼には一種の剣気がまつわりついていました。仲間の壮士たちはその夜はじめてこのフランス帰りの自由の理論家が驚くべき武術の体得者であることを知ったのです。

彼らは地方の自由民権論者たちの弾圧を治績の一つと心得ているらしい県令の中でも、専制者として噂の高い三島通庸が今度山県県令から福島県令に転じたのを機に数日帰京したのを絶好の機会として、これに天誅を下そうと動いてきました。服部密偵発覚事件は鹿鳴館近くの隠れ家に集まっている同志たちのもとへ赴く途中の出来事だったのです<sup>52)</sup>。

風間安太郎が今後どのようにして同士の中から密偵を探し出すかと口にしたことから議論が始まります。柿ノ木義康と秦剛三郎がそれぞれ思いついたことがあると言うので、二人はそれを別々の紙に書いて、後で見せ合うことにします。書き終えた二人が同時に差し出した紙片には同じ2文字「強盗」と書かれていました。「警視庁の密偵が、すなわち巡査たる者が、果たして強盗をやるか。これは何より辛辣な試験となるぞ。この話を持ちかけたときのそれぞれの顔色を見るのも一興である」と柿ノ木は山高帽の下でにんまり笑います。

「お前黙っとるが、この法に不賛成か」秦剛三郎が赤井に尋ねます。

「賛成せん」腕組みをしたまま赤井が答えます。「我々の名が汚れる。我々が政府大官の暗殺を計るのも自由と民権という理想を達成するためだ。捕まって絞首台に上っても、国事犯という誇りは残る。しかし、強盗をやって見ろ。政府の方じゃ必ずそっちに引っかけて、破廉恥罪の罪人として処刑するだろう」

柿ノ木義康が言います。「貴公名を惜しむのか。普通の戦いの場合ならそれも道理じゃ。しかし、我々の戦う的は政府だぞ。立場は対等でない。あらゆる国家権力を行使する相手に手段を考えておっちゃ、とうてい目的は遂げられん。目的さえ遂げれば斃れたあとの汚名など何をかあらんやじゃ。それはこの密偵探しのことに限らん。何にせよわれわれに惜しむものがあつてはそれが致命的な弱点となる。いや、そんな惜しむ分子があつては我々同士の致命的な障害となる」赤井が動じる色もなく、黙っているのを見て、柿ノ木はさらに言います。「さっき貴公は馬車屋を屍体隠匿の同罪に引っ張り込ん

<sup>52)</sup> 同上『幻燈辻馬車』41～2頁、文庫上 80～2頁。

で口を塞ごうとした。強盗をやらせて密偵を見つけ出すというのは、貴公の智慧から思いついたことじゃないか」「あれは後始末だし、これはこれからの話だ。おれはしばらく君たちから外れようと思う」赤井を凝視する三人に「今の件に拘泥してじゃない。大官暗殺の計画を延期するなら、ということだ」「すると、おぬし一人だけでもやるというのか」秦がこう言ったのは、赤井という同士が普段の言動は落ち着いているが、その実思い切った激情家であることを知っていたからです。「違う。同士の密偵云々の事はともかく、東京へ来ていろいろ様子を見た結果、確かに伊東・井上・松方を三人同時に暗殺するのは簡単なことじゃないことがわかった。三島通庸一人ならなんとかなるが、あれを東京で斃（たお）せば恐ろしい警戒と追求が始まり、かえって三元帥を護ることになるだろう。それよりおれはひとまず越後へ帰って、それから福島へ行ってみようと思う。まもなく三島は福島県へ帰任するだろう。そこできゃつが何をするか見てやろう。事と次第では河野広中先生と相談の上、そっちで三島に天誅を下す。あるいはやっぱり東京へやってくる事になるかもしれん。それは福島の状態次第だ。おれが当分同士の盟約から外れると言っても、まさか警視庁の密偵だとは思わんでくれよ」

馬車が止まります。三人が馬車を降り、それに続いて赤井も降りてきます。建設中の鹿鳴館の前です。壮士達の密会場所はそこから馬車も入らぬ路地の奥にあるのです<sup>53)</sup>。

赤井は干兵衛に、後の三人はここで降りるが、おれだけ巢鴨まで乗せてくれと頼みます。干兵衛は赤井を見てしばらく考え込んでいましたが、「この子さえ箱の中で寝させて頂けるなら参ってもよろしゅうございます」と答えます、赤井は「かまわん。退屈がまぎれていい。おいで、おじさんと一緒に行こう」と言って御者台からお雛を抱き下ろし、そのまま抱いて馬車に乗り込みます。干兵衛が鹿鳴館の前のガス灯の下に立っている三人の壮士たちに目もくれず、馬車を回そうとすると、白髪の秦が叫びます。「御者、よいか、めったなことをしゃべると、うぬはおろか、その小娘の命はないぞ。我々の同志は何百何千といるのだ。おぼえておけ」。すると山高帽の下で柿ノ木の二つの目がめらっと燃え上がります。他の壮士たちは思わず息を止めて動けなくなったほどです。干兵衛は口は一語もきかず、「わかっております」と

<sup>53)</sup> 同上『幻燈辻馬車』42～5頁、文庫上 82～7頁。

言うように笠をを伏せ、一言も言わず、馬車を煉瓦町の方へ動かしていきま  
す。「あいつ、大丈夫かな、あんなことをさせたのに妙に落ち着いたやつだ」  
と風間がつぶやきます。「もとは侍じゃな」柿ノ木が言います。「しかもどう  
も会津くさい。その上、なかなかの腕じゃ」「さすがの柿ノ木さんもちよっ  
と面食らっておったようだな」秦が訊ねると、「しばらくあれを監視しておっ  
て、密告の恐れが見えたら斬ろう。さあゆこう。ここは寒い」柿ノ木は鉄を  
打つように答えます<sup>54)</sup>。

### 赤井景韶（かげあき）

干兵衛は巢鴨の庚申塚の前で馬車を停めます。戸を開けると、赤井景韶<sup>55)</sup>  
は眠ったお雛を抱いて座ったまま自分も眠っていました。男らしい美貌の青  
年です。干兵衛が呼びかけると眼を開けて「やあ、これは」と笑い、「お雛  
坊に名をきいたよ。唄を教えてもらったんだ。それを歌ってるうちにお雛坊  
も、おれも眠ってしまったらしい」と言います。

赤井は「お前さん、御者はやってるが、侍だね」と問いかけます。「会津  
者です」と干兵衛が答えると「会津、そりゃ借りがある。おれは高田藩だ」  
と言います。その意味は、高田藩は徳川四天王と言われた榊原家なのに、維  
新の時、混乱のあげく、官軍に屈して一緒に会津攻撃に加わるという寝覚め  
のよくないことをしたからです。「これはさっき同士の乱暴を止めて良かった」  
と赤井は吐息をもらします。築地の雪原で柿ノ木義康の凶剣にさらされた  
干兵衛に刀を与え、子供の泣き声に干兵衛が夢中で背を見せた時、追い打  
つ柿ノ木の仕込み杖の前に立ち塞がったことを思い出したのでしょうか。干兵  
衛も「いや、まことにありがとうございます。おかげで命拾いました」

<sup>54)</sup> 同上『幻燈辻馬車』45～6頁、文庫上 87～90頁。

<sup>55)</sup> 赤井景韶は実在の人物です。安政六年（1859）越後の高田城下に生まれました。赤  
井家の家禄は10石2人扶持、父喜平は戊辰戦争で戦死、母に育てられました。明  
治10年（1877）、西南戦争に巡査として参戦、その後東京にとどまったが明治14  
年に帰郷、同年、現在の上越市を中心に結成された頸城自由党に加入しました。翌  
15年、大臣・参議の暗殺を志しましたが説得されて中止、この時書いた天誅党旨  
意書が同16年の高田事件の唯一の証拠とされ、彼だけが内乱陰謀予備で重禁獄9  
年の判決を受けました。東京石川島監獄に服役中に脱獄、車夫を撲殺し、同17年  
9月に逮捕されました。死刑の宣告を受け、翌18年7月27日、東京市ヶ谷監獄内  
の絞首台で27歳の生涯を閉じました。（江村栄一「赤井景韶」国史大辞典編集委  
員会編『国史大辞典第1巻』吉川弘文館 昭和54年）所収 51頁）。

と礼を述べます。

二人の会話は続きます。西南戦争への従軍のこと、赤井も警察隊として従軍したと話します。彼は海軍の背後を衝いて、長崎から八代に上陸した組だったと明かします。干兵衛は田原坂で息子が戦死したことを話します。赤井は「これは先輩だ。いわんや会津のお侍だったとは。さっきは屍骸の埋葬を手伝わせたりして、相すまなんだ」と謝ります。

干兵衛は馬車の座席の下から5合ぐらいは入る徳利と茶碗を取り出して赤井に酒を勧めます。「やあ、これはありがとうございます。しかし。変な酒盛りだな」馬車の窓にサラサラと春の雪が当たり始めます。近くに灯影も見えない寂しい巢鴨の往来に停まった馬車の中で二人は茶碗酒を飲みながら話し続けます。干兵衛はこの越後のどこか爽やかな壮士に好意をおぼえ始めます。

意気投合した二人は語り続けます。「あの山高帽の人だって、こわい人だが、また偉い人だ。同士の指導者なんだ。密偵使いの好きな圧政政府と戦うためにはあの制裁もやむを得なかった」

干兵衛は山高帽のあの人を知っている気がすると言い始めます。「ほう、柿ノ木義康を」と赤井が問うと「柿ノ木とおっしゃるのでござりますか。それなら違う」と干兵衛は言いよどみます。「あんたの知っている男とは」赤井の問いに干兵衛は「私が京都守護職に勤めていた頃、いちばん危険人物として追っかけた男、土佐の岡田以蔵、別名人斬り以蔵と言われた男です」と答えます。「柿ノ木さんはたしかに土佐人だが、姓は違うな」と言う赤井に「いえ別人でしょう。岡田以蔵はその後土佐へ召還されて殺されたという話を聞きましたから、別人に違いないが、実によく似ているのでござる。それも顔かたちより感じがね、剣をとったときの感じがね、あんな感じの人物は、ちょっとござらぬから」と干兵衛は返します。赤井は「では、弟かな。そんな話は聞いたことないが」と言い、自分はやがて福島へ行くつもりだ。福島県が悪県令三島通庸の暴政にさらされる兆しがあると話し、おぬし、会津人ならそっちへ帰る気はないかと勧めます。干兵衛は苦笑しながら答えます。「私はただあの孫のほかには考えることはござらぬ」<sup>56)</sup>

自由党の過激派壮士たちの実態が会話体を駆使してリアルに綴られています。これは決して絵空事ではありません。現実の自由民権運動も苛烈を極め

<sup>56)</sup> 前掲『幻燈辻馬車』46～9頁、文庫上 90～6頁。



ました。これから干兵衛一家と壮士たちの様々な葛藤のドラマが始まります。オッペケペー節の川上音二郎、講道館の嘉納治五郎、伊藤博文などなど、有名人が次々と登場します。干兵衛は息子の蔵太郎と女房のお宵の幽霊との誓いを果たすことができるのでしょうか。後篇をお待ちください。

—かつや・みちお 尾道市立大学名誉教授—